

令和7年度根本正顕彰会公開講座報告書

日時 令和8年2月15日(日)

会場 那珂市中央公民館 講座室

講師 根本正顕彰会副会長 横地富子氏

テーマ 「帝国議会議事録に見る根本正の活躍」

—「美術奨励に関する建議案」提出の背景と経緯—



(講演する横地富子副会長)

横地副会長は、これまで精力的に帝国議会の議事録から根本正の活躍を抽出して来た。その中で、今回は美術奨励など文化面にも貢献して来た根本正の姿を明らかにされた。ともすればこれまで、根本正の政治家としての活躍、教育施策について研究が進められてきたが、今回は芸術文化面という新たな視点からの根本正像を学ぶことが出来た。会員の調査研究の一端として、今後も議事録を探ることで、根本正の多面的な功績を見出すことが出来よう。

また、大子の十二所神社境内に建てられた根本正の胸像が、明治期の偉大な彫刻家大隈氏廣によって造られたこと、根本正が、大隈氏に敬愛する大恩人のビリングスの胸像制作を依頼し、氏の生地米国へ贈っていることなど、新たな発見であった。

会員一人ひとりとしても、根本正の姿を追い求めることは、まだまだ多くあるものであることを痛感させられた講座でした。17名の参加者には、新たな根本正像を得て、感慨深いものがあったものと喜んでいる。

<講座の内容>

詳細な内容は、後日送付の講演資料を参照していただきたいが、ここでは、横地副会長が最後に掲げられた「まとめ」を以て要約としておく(次頁へ)。 (下の写真は、講演会場)



「まとめ」

幕末、ヨーロッパの万国博覧会に出展した幕府や各藩の工芸品や美術品は優れた装飾品として絶賛され、日本の工芸品へのヨーロッパの関心が高まり外貨を稼ぐ輸出品となる可能性が出た。

当時の日本には西洋のような「美術」と「工芸」の区別がなく、日本の美術品は装飾的・工芸的とみなされ西洋美術より低い評価をうけていた。

明治維新後の近代化と社会の変化により日本美術は大きく揺れ動いた。政府は早急に西洋式の「ファイン・アート」(純粋美術)を導入し西洋諸国に恥じない芸術体勢を整備しようとし、日本の諸派の絵画などは旧弊なものとなされ存続の危機に陥った。

さらに廃仏毀釈や大名家の没落などで多くのすぐれた美術品が古道具市場にあふれ、お雇い外国人の収集した日本美術品や美術商だった林忠正らの日本美術品の積極的な売買により欧米に流失した。これがヨーロッパにジャポニズムを生み、浮世絵は印象派の画家に大きな影響を与え近代絵画が生まれた。

根本正はアメリカで先進教育を受け、帰国時にはヨーロッパを巡りイギリスで議会政治を学び、ドイツで名士に面会、国会を見学し国家観と歴史観を学び、フランスのパリ万博を視察し先進文明の受容を認識し、イタリアではポンペイの最後の日の遺跡を見学し文化が一瞬で壊滅した自然の威力に驚いた。帰国後政治家として活躍する中、欧米で学んだ先進文化を取入れ、自国の文化を守る重要性を認識し美術界のために尽力した。

国は、日露戦争の後、明治 40 年、文部省美術展覧会(文展)開催し、大正 7 年まで続く。

大正 8 年に帝国美術院が帝展を昭和 12 年まで、昭和 12 年に帝国芸術院が新帝展を開催する。

美術館は、東京府美術館が 1926(大正 15)昭和天皇の成婚記念として福岡の実業家 佐藤慶太郎からの 100 万円の寄付を受けて上野公園内に建設された。

明治 30 年古社寺保存法が施行、昭和 4 年国宝保存法 戦後の文化財保護法へと続く。

【補足】

○根本正はなぜビリングス像を大熊氏廣に作製を依頼したのか

① 大熊氏廣は当時の日本彫刻界の指折りの大家の一人であった。当時の日本は銅像時代の幕開けで各地に様々な銅像がつくられはじめ、そのきっかけとなったのが 1893 年(明治 26 年)に除幕した大熊氏廣作の靖國神社の大村益次郎像であり、日本最初の大規模なモニュメントの銅像であったため、お披露目前から新聞報道で話題となり大熊氏廣は一躍有名になっていた。1890 年ヨーロッパ留学から帰国した時点で洋行帰りの新進彫刻家として大熊氏廣は知られ始めていた。根本正はこうした報道を目にしていたと思われる。

② 根本正は欧米などでは、広場・公園・道路・会社・学校・教会・墓地など公共の場にモニュメントを設置したり、個人や団体を顕彰するための肖像彫刻を制作する文化を留学時代に学んでいたと思われる。明治 27 年～28 年に中南米移住地調査から帰国しビリングス氏の死を知り顕彰のため胸像制作を大熊氏廣に依頼しようと考えたとと思われる。

「質問がありました」

「大郡線」とは？ 国有鉄道としては、はじめに常陸大宮駅から郡山までが開通していた。

「ポンペイ最後の遺跡とは」？ 紀元 79 年の火山噴火で一瞬にして埋もれた古代ローマ都市の跡。

帝国議会議事録に見る根本正の活躍

「美術奨励に関する建議案」提出の背景と経緯

○最初の根本正の胸像を作った^{おおくまうじひろ}大熊氏廣

- 1 根本正はバーモント大学時代の恩人フレデリック・ビリングスの胸像を大熊氏廣に制作依頼しバーモント大学に寄贈
- 2 大熊氏廣は昭和5年大子町の十二所神社に建立された水郡鉄道完成記念碑 根本正の胸像を制作
- 3 根本正はビリングス家に安藤広重の浮世絵や高瀬五畝の日本画の色紙の日本美術品を贈呈（令和4年に高瀬五畝の色紙が根本家にお里帰りしている）



大熊氏廣



フレデリック・ビリングス胸像
バーモント大学に現存



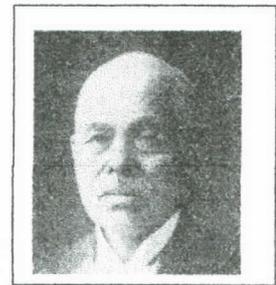
根本正の胸像
大子町十二所神社に建立

大熊氏廣

- 1856（安政3）現在の埼玉県川口市八幡木に生まれる
- 1876（明治9）工部美術学校彫刻科に入学 ラグーザに教わる
- 1880（明治13）メソジスト派下谷教会で洗礼を受ける
- 1882（明治15）工部美術学校を首席で卒業する
- 1885（明治18）大村益次郎像を委嘱される
- 1888（明治21）10月ローマ美術学校へ入学翌年9月ローマ美術学校修了
- 1893（明治26）大村益次郎像が完成し靖国神社に設置され除幕
- 1895（明治28）根本正は制作を大熊氏廣に依頼しフレデリック・ビリングス像をバーモント大学に贈る
- 1930（昭和5）根本正の胸像が完成し大子において12月に胸像除幕式が行われた
- 1934（昭和9）死去

根本 正

- 1851 (嘉永 4) 常陸国東木倉村に生まれる
- 1863 (文久 3) 豊田天功の家僕となる
- 1867 (慶應 3) 水戸藩南御郡方の役人になる
水戸藩奉行服部潤次郎がパリ万博から持ち帰った
マッチと時計を見て西洋文明に驚き、西洋文明と
英語を学ぶ決心をする
- 1872 (明治 5) 中村正直の私塾に入る
- 1874 (明治 7) 駅遞寮雇となる
- 1877 (明治 10) 住吉教会で洗礼を受ける
- 1879 (明治 12) 渡米 弁護士バラスト一家で働きながらオークランド市の小学校入学
- 1885 (明治 18) バーモント大学に入学 (フレデリック・ビリングスの援助を 4 年間受ける)
- 1889 (明治 22) バーモント大学を卒業し、英独仏伊を歴訪し翌年 1 月帰国
この年は第 4 回パリ万博 (フランス革命 100 周年・エッフェル塔建設) が
開催されていて根本正は見学している
- 1893 (明治 26) 移民調査のためメキシコに出発
- 1894 (明治 27) 中南米視察に出発
- 1895 (明治 28) 大熊氏廣に制作を依頼したフレデリック・ビリングス胸像と根本正が書いた
「フレデリック・ビリングス伝」をバーモント大学に贈る
- 189~~7~~⁸ (明治 31) 第 5 回総選挙に自由党から立候補し初当選
- 1900 (明治 33) 美術奨励に関する建議案提出 (修正可決)
- 1930 (昭和 5) 常陸大子で根本正の胸像除幕式
- 1933 (昭和 8) 死去



根本 正



大村益次郎像

○根本正はなぜビリングス像を大熊氏廣に作製を依頼したのか

①大熊氏廣は当時の日本彫刻界の指折りの大家の一人であった。
当時の日本は銅像時代の幕開けで、各地に様々な銅像がつくられ
はじめ、そのきっかけとなったのが 1893 年 (明治 26 年) に除幕
した大熊氏廣作の靖国神社の大村益次郎像であり、日本最初の大型
モニュメントの銅像であったため、お披露目前から新聞報道で話題
となり大熊氏廣は一躍有名になっていた。

1890 年ヨーロッパ留学から帰国した時点で洋行帰りの新進彫刻家として大熊氏廣は知られ始
めていた。根本正はこうした報道を目にしていたと思われる。

②根本正は欧米などでは、広場・公園・道路・会社・学校・教会・墓地など公共の場に
モニュメントを設置したり、個人や団体を顕彰するための肖像彫刻を制作する文化を留学時代
に学んでいたと思われる。明治 27 年～28 年に中南米移民地調査から帰国しビリングス氏の死
を知り顕彰のため胸像制作を大熊氏廣に依頼しようと考えたと思われる。

③胸像が海を渡るという記事が新聞に小さくだが掲載された。
維新後の西洋美術の導入成果として西洋文明のアメリカに洋風彫刻を日本が送り出せるまで
に成長したという内容。

水郡鉄道開通の記念碑建設運動

なにか世の中の為になる仕事をすると、その人の事績を顕彰するために記念碑を建てたり、銅像を建てたりする場合が少なくない。大郡線も昭和 2 年 3 月 10 にやっとの事で常陸大子駅までの開通を見た。足の利便はえられ、地方文化の開発にも大いに役立つことになった、これ偏に根本正代議士をはじめ地方有志の人達の尽力の賜であるから、この機会に大郡線開通の記念碑を建て、根本代議士の胸像を建設して末永くその事績を残しておこうとの話が持ち上がり、昭和 4 年 10 月はじめてその事業が企画されたのである。

その動機は、ある日のこと、佐原村（現在の^{コイネガワ}大子町佐原）の神永秀介氏と大子町金町の石井栄次郎氏がたまたま上京し、その帰り途に上野駅のホームで出会い、常磐線の列車に同乗し、車中でいろいろと談話を交わしている間に「大郡線開通の記念碑建設等の話が出て、二人共誠に良い思いつきであると合意し、帰ると早々同志に図って、その計画を是非実現しよう」といって別れたことが実行に移されたのであった。

翌 11 月 25 日神永氏宅に石井、神永両氏をはじめ佐原村の石井覚一、大島経次郎、木澤静の三氏とそれにたまたま佐原村の実家に帰郷していた鎌倉在住の予備海軍中佐石井鉄之介氏がこの話を聞いて馳せ参じ、以上六名が集まって打合せた結果、先づ保内郷地方の有志に働きかけて来月初旬ころ大子町で発起人会を開催すること、それから木澤氏に委嘱して水郡鉄道開通の記念碑建設の趣意書と発起人名簿を作成すること、と打合せてその日は別れたのである。

その趣意書の内容は

水郡鉄道の開通は我が県北に於ける宝庫の扉を開くものにして、地方一般其の一日も速がならんことを渴望して止まざる所なり。幸いにも時の鉄道当局、此の必要を認められ去る明治 43 年より是れが調査に着手し、続いて貴衆両院の通過する所となり、地方有志是れが速成を叫んで止まず。爾来官民挙って其達成を期せしに其功空しからず、今や県北宝庫の称ある保内郷大子町まで開通するに到り、昭和 4 年中には福島県東館まで進み殆ど全通すると加うも過言に非るべし。ここに於いてか吾人は此の開通を記念すべく同志相謀り、大子町を中心として一大記念碑を建設し、一は之れが速成に関して終始一貫尽瘁せられたる功勞者根本正翁の徳を頌し、一は此の交通機関の利便を得て地方文化の発展に一大光明を放てる事績を永遠に伝へんと欲するは従爾ならざるを信じ、本事業を企図せる所以なり。冀くは同志の士奮って御費同あらんことを。

こうして発起人の顔触が削ろうと月 10 日発起人会を大子町栄屋に開催し、この事業を行うための案件について協議を行い、総裁に元老の神永秀介、会長石井栄次郎、会計菊池信太郎、常任書記木澤静の四氏を満場一致で推薦し、建設についての仕事は着々と進められた。

胸像大子駅に着す

昭和5年(月)日待望の根本正翁の胸像が大子駅に到着した。この胸像は彫刻界の大家、大熊氏廣氏が昭和5年5月24日東京芝四国町の邸宅に根本代議士を訪ねて顔面その他の寸法を計り、同年1月2日根本代議士が宮城の正殿に於いて天皇、皇后陛下に年賀の拝謁を賜り、その帰途、写した記念の写真を基にして製作したもので、燕尾服に勲三等の勲章を帯用した正装姿である、台付高さ三尺七寸六分の大きさのものである。

製作費2千3百86円90銭、運賃36円90銭。

こうした経緯をへて敷地が決ると、いよいよ胸像建設の工事に着手した。

台石の前面には鉄道大臣元田肇氏が記念に自筆した。

「水郡鉄道正全通、百貨輸来一瞬中、料識吾兄帯微笑、溪山到处入春風」の詩を刻み、向かって右横には根本正翁自作の和歌「ふまれても根強く忍べ路芝の やがて咲く春をこそまて」を刻み込んだ。工事はほとんど尽夜兼行で突貫工事に当たった結果以外に早く進み、除幕式は昭和5年12月7日に牛島知事をはじめ三百八十余名の招待客を招き、盛大に挙行された。

胸像除幕式の模様

明けて7日には胸像除幕式が行われた。この日に根本正翁は、とく子夫人をはじめ11名の家族と共に午前5時50分上野駅一番発の常磐線に乗り、同伴の石井鉄之介氏からは大子駅に午後零時16分に到着するとの連絡があり、石井、外池正副会長が袋田駅まで出迎え、一行と同乗して予定通り大子駅に着いた。それから石井会長が一行を案内して十二所神社に参拝、社務所でしばらく休憩して除幕式に臨席した。これより早く式場は各係員の奔走によって準備、萬端整えられ、零時半には来賓一同が着席、松浦、塚田の両者掌によって清祓が行われ、外池副会長が開会を宣して式が執行された。次いで玉串が奉納され、工事委員黒崎甲子郎氏が工事報告をして後、石井会長の式辞を朗読、来賓の稲敷郡高田村の根本益次郎、江戸崎町の山崎稔の両氏が地方代表として祝辞をのべ、更に新妻大子駅長、山崎大子農林学校長、富塚大子警察署長、峯間商大教授、馬場いばらき新聞大子支局長、中崎俊秀代議士等がそれぞれ祝辞演説を行い徳川国順公、元田肇、山崎猛、小峰満男、床次竹二郎、室田義文、高瀬梅吉、竹内権兵衛、大連の吉成孝一、湊町の宮内庄兵衛、石井三郎、大熊氏廣、京城大学図書館長吉村定吉、石井碩、岡田道一氏等各名士の祝電を朗読してから根本正翁が約30分にわたって挨拶をのべた。それが終ると石井会長が答辞をのべ、外池副会長が閉会の辞をのべ午後2時盛会裡に式を終った。それより十二所神社境内に設けられた宴会場に臨んで、いずれも胸襟を開いて当日の祝典を祝い、根本翁の発声で萬歳三唱して散会した。

翌8日には幹事一同が事務所に集まって事務の整理を行い、当日参列出来なかった人達には一々記念品を小包にして発送、9日には沿線各村の小学校に根本翁の伝記「微光八十年」と水郡鉄道建設史を寄贈した。

尚一言付記せざるべからざるは、記念品として除幕式当日一般に贈呈せる「微光八十年」冊子の編著者石井良一(石井栄次郎氏の子息なり)氏におけるその努力は実に容易の業にあらず、特に感謝して措く能はずる所、聊(イササ)かこれを記して筆を擱く。

根本正は海外に永く残る恩人の肖像だからこそ、一流の作家による一流の作品を贈りたかったと想像できる。この後も大熊氏廣とは交流が続いた。

(川口市立文化財センター学芸員)

○美術奨励に関する建議案提出までの経緯

①明治30年 美術の保護と奨励に関する建議(皇室技芸員(1890年 宮内省運営の美術家や工芸家に皇室から栄誉を与える顕彰制度)から大蔵大臣松方正義、外務大臣大隈重信 日本美術協会会長佐野常民、帝国博物館総長九鬼隆一他要人へ提出)

- 1 国家一定の主義方針によって美術全般を統轄する所の独立官衙^{かんが}を設置すること
- 2 美術調査委員を置くこと
- 3 専門の技芸家・学識家を選んで美術評議員とすること
- 4 美術上功労顕著な者を表彰すること
- 5 優秀作の買上げ・保存を行うこと
- 6 美術大学を設立すること
- 7 内外美術資料展示のために美術館を設置するか帝国博物館を拡張すること
- 8 美術家に宝物拝観、模写の特典を与えること
- 9 美術団体に補助金を支給すること

②明治31年 美術局設置計画(東京美術大学 正木直彦 高田早苗ら)

(古美術保護と美術教育の目的)

// 文部省に美術課おかれる(正木直彦課長)

③1899年(明治32年11月開会) 第14回帝国議会本会議に「美術奨励に関する建議案」を根本正と安藤亀太郎とともに提出

1900年(明治33年2月14日) 満場一致で修正可決

「美術の発達奨励を企画する協会にして有益と認むべきものには相当の補助金を與ること」が追加される

- ・皇室技芸員の建議案の主旨を汲んで作成。
- ・明治33年(1900)パリ万国博覧会への参加を前にしてこの運動を積極化するために美術家たち(明治美術会・1889年工部美術学校出身の美術家たち中心に結成)は根本正、安藤亀太郎らに帝国議会に建議案の提出を依頼した。

美術奨励に関する建議案 内容

- 1 美術調査会を設置し海外のその道の学識経験者を集め、美術に関することを調査させ顧問とすべき
- 2 国立美術館を設置し国内海外古今の美術を蒐集陳列すべき
- 3 知名の技術家を選び海外に派遣しその国の名作の研究をさせるべき

目的

- 1 国の工芸を進歩させるにはその基礎となる美術を発達させる。文明国はすでに保護奨励の法を設

けている。

2 近年は各国競ってその道を講じ、美術行政に生かしている。この競争の激しい場に工芸を進め輸出を増やせば国の富源を増やすよい方法である。

3 東洋の工芸国・美術国と日本自ら名乗るにはこの保護奨励の法は急務である。

第十三 美術奨励ニ關スル建議案 根本正君外一名提出

美術奨励ニ關スル建議案

國家ノ工藝ヲ進歩セシムト欲セハ先ツ之ヲ基礎タル美術ノ發達ヲ圖ラサルヘカラス故ニ文明諸國皆夙ニ之カ保護奨励ノ法ヲ設ケテ近年ニ至リ各國益々競フテ其ノ道ヲ講シ或ハ特ニ美術行政ニ意ヲ用ニルコト最慎重ナルアリ苟モ今後此ノ劇甚ナル競争場裏ニ立チ工藝ヲ進メ輸出ヲ増シ以テ國家ノ富源ヲ増サムト欲セハ必ヤ相當ノ方法ヲカルヘカラス況ヤ東洋ノ工藝國美術國ヲ以テ自ラ任スル我カ國ニ於テオヤ而シテ之ヲ保護奨励ノ方法ニ至リテハ一ニシテ足ラサレトモ最急務ナルモノヲ左ニ列記ス

一 美術調査會ヲ設ケ東西各其ノ道ニ付學識經驗アル者ヲ招集シ美術ニ關スル一切ノコトヲ隨時調査セシメ又美術ニ關スル諸事ノ顧問ト爲スヘキ

コト

一 國立美術館ヲ設ケ内外古今ノ美術ヲ蒐集陳列スヘキコト
一 知名ノ技術家ヲ選拔シ海外ニ派遣シ彼國ノ名作ヲ研究セシムルコト
政府ハ速ニ之カ施設ニ著手シ美術保護奨励ノ實ヲ擧ケムコトヲ望ム
右建議ス

○政府の対応

- ・ 明治美術会の役員や提出者議員が文部省に速やかに実行するようしばしば迫ったが握りつぶされる。
- ・ 文部省美術課の予算は削られ、明治 33 年 5 月には美術課廃止になる。
- ・ 明治美術会・東京彫工会を中心に美術同志会を結成し、請願書を農商務省、文部省・首相官邸（大熊氏廣らが）へ提出
- ・ 政府は消極姿勢だった（東京芸術大学 100 年史）

○明治日本の美術行政

- 1 殖産興業（博覧会）
 - 2 古美術保護（博物館）
 - 3 美術教育（東京美術学校）
- ・ 日本は 1873（明治 6）ウィーン万博に初めて出品参加しこの時から日本の「美術」が始まる。明治初期「美術」は言葉も概念もなかった。西洋の概念の翻訳語として生まれた。出品した工芸品が好評を得、重要な輸出品となり美術伝統工芸品が産業奨励となる。
 - ・ 殖産興業政策の芸術育成の奨励は工部省のもと工部美術学校（1876～1883）（工部大学の付属

機関)を設置。西洋美術を研究し教育する目的は、モノを立体的に捉えて設計図に落とししたり逆に設計図から製品の形を作ったりする技術の習得。

西洋から取り入れる産業勃興の役に立つ技術だった。日本の近代化に必要な技術として画学科と彫刻科のみ設置された。

美術の本場フランスからではなく、ルネサンス美術のイタリアからのお雇い外国人（フォンタネージ、ラグーザ、カペレッティ）が招聘された。のちの東京大学工学部へとつながる。彫刻科のラグーザから大熊氏廣は学び首席で卒業する。

- ・1889（明治22）東京美術学校が岡倉覚三（天心）フェノロサを中心に日本の伝統美術の保護を目的として設置された。最初は西洋画のコースはなく、反発した旧工部美術学校出身の洋画家は、同年「明治美術会」という団体を設立した。

後に西洋美術も取入れ共栄の道に向かい現在の東京芸術大学につながる。



岡倉天心

○日本の美術品・工芸品の大量流失

- ・藩籍奉還（1869）・廃藩置県（1871）により没落した大名が経済的困窮に陥り所有していた優れた作品を所有困難になり二束三文で手放す。

- ・神仏分離令（1868）により廃仏毀釈運動が起きる。明治政府は権威確立のため、神道国家（天皇中心国家）目指した。寺院では仏教への迫害・破壊行為がおこり仏像や仏具・由緒ある経典・仏画など伝統美術が軽視され二束三文で手放したり破壊された。

- ・フェノロサ（1878 来日 日本美術を再評価し東京美術学校の創設や日本の美術行政にかかわる）
- ・モース（1877 来日 米の動物学者 東京帝国大学教授 大森貝塚を発掘）
- ・ビゲロー（1882 来日 米の医師 日本美術・仏教の研究者）

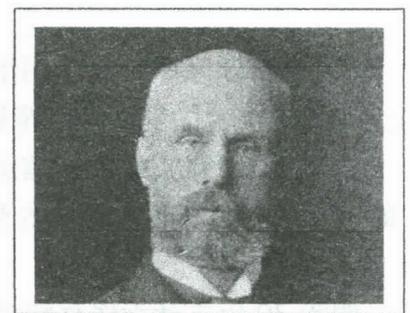
彼等（お雇い外国人）が収集した質量とも優れた浮世絵などの作品をボストン美術館へ寄贈した。これらの寄贈品によりボストン美術館は、仏画、絵巻物、浮世絵、刀剣など日本美術の優品を多数所蔵し日本との関係が深いことでも知られる。20世紀の初めには、フェノロサに誘われ岡倉天心が本館に在職しており、敷地内には彼の名を冠した小さな日本庭園「天心園」が設けられている。



アーネスト・フェノロ



エドワード・S・モース



ウィリアム・S・ビゲロー

- ・パリの林忠正

1884年パリで日本の美術品（工芸品）を扱う美術商となり1889年浮世絵を扱い始める。

1890 年頃から印象派のコレクションを始める。貧しかった印象派の画家から浮世絵の代金代わりに作品を受け取り、これを日本の若い画家の為にコレクションを作る

1900 年のパリ万博で日本事務局の事務官長をつとめ、「日本古美術展」として展示。

浮世絵を流失させた国賊とまで言われたが現在は浮世絵の芸術性を守り「世界に浮世絵を広めた功労者」と評価されつつある。

集めた印象派の絵画を展示する西洋美術館建設の構想もあったが病気のため死去し実現できなかった。



林忠正

1853 (嘉永 6) ~

1906 (明治 39)

○まとめ

幕末、ヨーロッパの万国博覧会に出展した幕府や各藩の工芸品や美術品は優れた装飾品として絶賛され、日本の工芸品へのヨーロッパの関心が高まり外貨を稼ぐ輸出品となる可能性が出た。

当時の日本には西洋のような「美術」と「工芸」の区別がなく、日本の美術品は装飾的・工芸的とみなされ西洋美術より低い評価をうけていた。

明治維新後の近代化と社会の変化により日本美術は大きく揺れ動いた。政府は早急に西洋式の「ファイン・アート」(純粹美術)を導入し西洋諸国に恥じない芸術体勢を整備しようとし、日本の諸派の絵画などは旧弊なものともみなされ存続の危機に陥った。

さらに廃仏毀釈や大名家の没落などで多くのすぐれた美術品が古道具市場にあふれ、お雇い外国人の収集した日本美術品や美術商だった林忠正らの日本美術品の積極的な売買により欧米に流失した。これがヨーロッパにジャポニズムを生み、浮世絵は印象派の画家に大きな影響を与え近代絵画が生まれた。

根本正はアメリカで先進教育を受け、帰国時にはヨーロッパを巡りイギリスで議会政治を学び、ドイツで名士に面会、国会を見学し国家観と歴史観を学び、フランスのパリ万博を視察し先進文明の受容を認識し、イタリアではポンペイの最後の日の遺跡を見学し文化が一瞬で壊滅した自然の威力に驚いた。帰国後政治家として活躍する中、欧米で学んだ先進文化を取入れ、自国の文化を守る重要性を認識し美術界のために尽力した。

国は、日露戦争の後、明治 40 年文部省美術展覧会 (文展) 開催し大正 7 年まで続く。

大正 8 年に帝国美術院が帝展を昭和 12 年まで、昭和 12 年に帝国芸術院が新帝展を開催する。

美術館は、東京府美術館が 1926 (大正 15) 昭和天皇の成婚記念として福岡の実業家 佐藤慶太郎からの 100 万円の寄付を受けて上野公園内に建設された。

明治 30 年古社寺保存法が施行、昭和 4 年国宝保存法 戦後の文化財保護法へと続く。

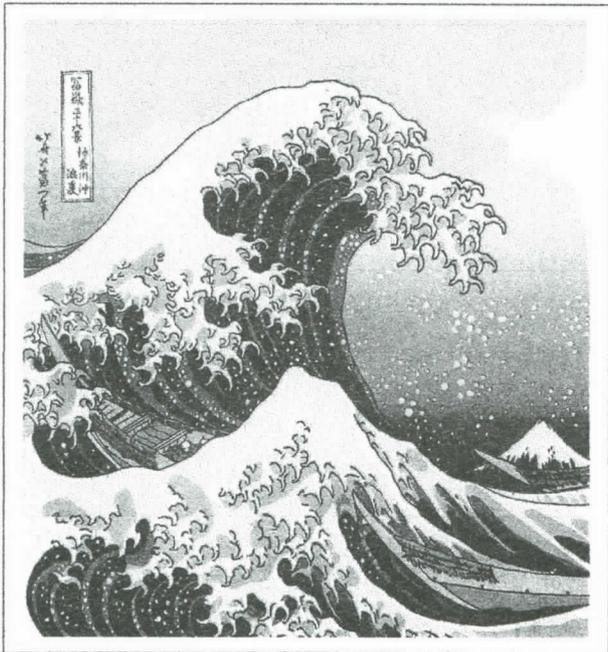
欧米に流出した日本美術



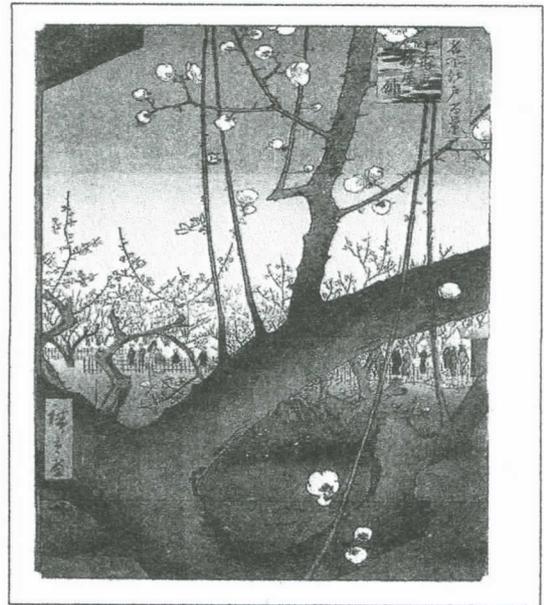
きびおとどにつとうまき
吉備大臣入唐絵巻 ポストン美術館所蔵



平治物語絵巻 きんじょうどのやきうち
三條殿焼討
ポストン美術館所蔵



かながわおきなみうら
神奈川冲浪裏
葛飾北斎



かめいどうめやしき
龜戸梅屋舗
歌川広重